巻 頭 言

航空自衛隊は、今年、創設から60年の大台を越えました。この間、航空事故など数多(あまた)の苦難を乗り越え、また、先達らの努力の積み重ねを経て、今日の姿が形作られています。今まさに、わが国を取り巻く安全保障環境が一層厳しさを増すなか、直(ひた)向きに務めを果たし、平和の蒼(あお)い空を繋(つな)いでいく。それがわれわれの使命であり願いでもあります。

この空の守り。それはこれまでも戦闘機やミサイル、レーダーなどの物的な力、つまりハードパワーのみによって実現されてきたわけではありません。恫喝(どうかつ)や浸食。絶えず隙を窺(うかが)う者との延々とした対峙(たいじ)。これらに草臥(くたび)れることのない心、健全さ、賢明さ。こうしたソフトパワーもまた、重要な一翼を担ってきたことは疑いありません。この維持と強化。それが私ども幹部学校に課せられた務めであります。この活動の一環に研究があり、これを促進するため、平成26年８月、私ども幹部学校に、航空研究センター（以下「センター」という。）が設置されました。

センターには、エア・パワーを深く研究し、航空防衛の進むべき将来を見通すことが期待されています。その活動の一つに本書『エア･パワー研究』の発刊があります。これには、センターで行っている研究の成果等を採録することとしております。その目的の第一は、内外に広く航空防衛についての健全な理解を得ようとするものです。また、これと同時に、われわれの研究の一端を披露することによって、広く意見を交わす機会が得られれば、研究のさらなる発展にも有益であろうと考えています。

第２回目となる本号には、以下の論文等を収録しました。

まずは、空軍参謀長等招へい行事（Air Chiefs’ Dialogue in Japan : ACDJ）シンポジウムについての紹介です。これは、先年、航空自衛隊が、創設60周年を祝うにあたり、記念行事の一環として開催したもので、私ども

幹部学校がその運営にあたりました。各国の空軍トップらが一同に集い、胸襟を開いて、空の平和と協力、そしてエア・パワーの将来に係る展望について、意見を交換し合えたことは、大変意義深いものがあります。その概要を、巻頭「航空自衛隊60周年を迎えて」に、前航空幕僚監部監理監察官（現人事教育部長）城殿将補の論文「航空事故防止の歩み」とともに採録しましたので是非ご一読下さい。

また本号には、わが国の航空防衛を取り巻く環境について分析を試みた、いくつかの論文等を収録しました。

今、中国の航空戦力の近代化は著しく、とりわけ注目すべきものは通常兵器型即時全地球攻撃（Conventional Prompt Global Strike : CPGS）兵器の開発です。これは ICBM に搭載される極超音速飛翔（しょう）体であり、成層圏突入時にブースト滑空を行う機能を持つといわれるものです。研究メモ「INF 条約と CPGS」が分析するとおり、これが生み出す、ほとんど迎撃不能な全地球的規模の即時攻撃（Conventional Grobal Strike）能力は、今の抑止の枠組みを揺るがす可能性があると考えられます。

また、そうした装備面のみならず、作戦遂行の能力に関しても、研究メモ「東シナ海における人民解放軍の能力および統合化についての考察」が分析するとおり、着実にそれは高まりつつあるように思われます。

以上のような動きは、同盟国である米国の対応にも影響するものと見られます。岸本論文「米空軍のリバランスの方向性と航空自衛隊の在り方」および研究メモ「航空自衛隊として重視すべき「耐性的拒否能力」」が説くように、米国が空軍力整備の限られた資源を、戦略爆撃機のような戦略的抑止能力の強化に傾斜して配分するのか、あるいは戦闘機のような戦域的対処能力の充実に配分するのか、それは航空自衛隊の在り方にも関わる問題と考えられます。

中国の動向について考える時、忘れてはならないのは、その実態や真意が一体どこにあるのかを正しく見極めることです。意図や能力が過大、あるいは過小に伝えられることによって正体が朧（おぼろ）になり、誤解の生じるおそれがあります。この点、いわゆる三戦と呼称されるものは、手管

を尽くした駆け引きであるが故に、真意や実態の把握を難しくすることに大きな危険性が感じられます。というのも、史上、相手の能力を過大にあるいは過小に評価することによって、いたずらな軍拡競争や不信、恐怖感が生まれ、その挙げ句に戦争が引き起こされてきた例が幾つも見られるためです。研究メモ「中国による三戦の定義等およびエア・パワーに関する三戦の事例」は、こうした点を考慮した三戦に関する初度の分析です。これについては今後も継続的に見て参りたいと考えています。

本書は、今回で第２回目の発刊となります。これからも、われわれは研究を深化あるいは拡張させ、その成果の是非を順次、本書において問うて参るつもりです。各方面からさまざまなご意見を賜ることができれば幸いに存じます。

平成 28 年 1 月

航空自衛隊幹部学校長　空将　小野　賀三